

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十四年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十八卷九号（通卷第二二三号）

鈴



くろつけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第213号

1. 2012

謹賀新年

エナメルの靴

品川 鈴子

口利かぬまま元日も暮れにけり

読初めに書下ろし稿あづかりぬ

連衆の弟子ら遣らずの摩耶しぐれ

エナメルの靴がめり込む霜柱



電池切れサンタと黙し早寝せり
神在りの地へ左遷され恋逃がす
綿帽子の嫁御も仰ぐ照紅葉
碑の除幕別子風に捲られて
凧のままに除幕の白栲よ
降神に色葉の舞ひて句碑開き



玉鈴

吟

愛媛 年森恭子

眠らぬ子抱きて現うつの長き夜
団欒の真似事ひとり夜食せり
低音の家電の音か秋の声
流行の服とウィッグ案山子立つ
どんぐりのありてまわりをみまはせり

兵庫 内藤三男

思ひ出すこの手応へや稲を扱ぐ
審査待つ菊にも緊張はしりけり
紅葉見ゆる窓側いつも妻の席
山僧に妻子のありて柿をもぐ
灯火親し妻にはいまだ机なく

兵庫 中尾廣美

秋一献「まあいいでしょ」と医者と言ひ
死んだふり守宮がするを見逃しぬ
帰りぎわ手さげにそつと梨二つ
秋出 水工夫 荒声 響く 谷
ゆずられて弁当開く薔薇の園

大阪 中島霞

鳥渡り後尾ほつるる飛行雲
錦秋の片木に袱紗を裏に為す
秋燈を低めて解くは電流値
降る雨に覇氣無く揺れて枯るる葦
長き夜の因数分解子と競ふ

大阪 中田寿子

蠮螋の鎌は威嚇か挨拶か
運動会瞬足といふ靴履いて
父の手は魔法の様に栗を剥き
腹わたは君へあげると秋刀魚食ぶ
虫鳴くやテノールバリトンバスもあり

神奈川 永塚尚代

影富士の肩に入り日や秋気澄む
曼珠沙華棚田の畦を燃え立たす
刈田風深々かぎぬ町育ち
駅からは胸にそるひの赤い羽根
連れ添ひて似て来た夫婦栗ご飯

大 阪 野口喜久子

秋の蝶無紋の羽をひるがへす
山柿活く華台に一つ転ばせて
山柿を流派問はずに投げ入れて
霧ごめの六甲背ナに誓子館
花芒誓子の迎へ受くるさま

兵 庫 蓮尾みどり

世故に長け齢に長けし石榴笑む
猿酒や八方尾根の裾泊り
宵闇のさほど濃からず薄からず
本復の葉缶に暇をやる千振
霧ぶすま御嶽山の七合目

兵 庫 長谷川 鮎

寄せて引く波のごとくに遍路出む
弁慶の力石まで梅枝垂れ
ぞうり編む床暖房にべったり座し
母に名を忘れられたりちゃんちゃんこ
母の顔穏やかになり冬すみれ

兵 庫 林 哲夫

秋霖に外出のまた阻まれし
薄紅葉同窓句会初参加
古暖簾くろき新蕎麦酒もあれば
出石郷新蕎麦どんと食べ競べ
仏壇にポージョレ・ヌーボー赤と白

兵 庫 林 美智

いろいろと云ひわけつくり温め酒
芋虫を手掴みふいの大声を
つぎつぎの事件見つむる鱗雲
いつしかに訪ふ人もまれ秋あかね
思ひ出し古着を探すそぞろ寒

愛 媛 福島 松子

口笛の調子つばずれの花野行く
背の高き秋草多し庵跡
塀越えて行先迷う薦の先
おぼろげな記憶たどりて萩の花
大登窯跡ひんやり姫女苑

愛 媛 福田かよ子

里山の裾より湧く霧峰を這う
気温差の激しき目なり秋茜
虫の声清しき夜空村眠る
新走りタッチパネルで寿し注文
深呼吸す童巫女舞う秋祭り

兵 庫 藤井久仁子

鳥頭困ふ峻峰寄り難し
彼の死をやつと認めて望の月
糠味噌の底を二搔き冷えの朝
見惚れをり尾瀬の池塘の草紅葉
誰からも好かれて逝けり月見草

兵庫 藤田かもめ

白寿てふ恩師にまみゆ敬老日
故知らぬ体育の日の大護摩供
萱葺の反りを仰げば鳥渡る
秋茄子は誓子好みの紺ばかり
古臼を土台の祠薄紅葉

兵庫 史あかり

空耳か赤児泣く声そぞろ寒
観音の御手長く垂れ秋小浜
屑籠に反古のふえゆく長き夜
福耳を恥じらふ少女野菊咲く
灯下親し未知の言葉に又出合ふ

兵庫 古井公代

独り居の犬鳥魚に秋深む
曼珠沙華京に女の車引き
飛行機の離着も景に秋の宿
垣根より介護師の声秋の昼
掃く間にも髪にこぼるる金木犀

大阪 古林田鶴子

十六夜の浜に出てみる車椅子
うすもみぢ並木馳け行く部活動
二本杖色なき風の触れて行く
恙なし辛寿の義姉と良夜かな
あぶれ蚊に血を分け与ふ八十路なり

香川 細川知子

人となり墓碑に刻めり一位の実
台風禍教師らなげく時間割
山胡桃老いても減らぬ負けをしみ
秋日傘低く傾しげて花屋まで
お子様はちよつと御遠慮美術展

兵庫 細野恵久

その中に一点の星初茜
七日爪まづは紙面に目を落す
海鳴りのここままでとどく冬苺
もう一羽来て臘梅を啄める
モスレムもユダヤも墓に冬日受く

愛媛 松井洋子

縁側の無き家ばかり昼の虫
菊日和名馬の訃報一面に
アイロン掛けの山を尻目に十三夜
「空の日」もダイヤ乱れて野分前
男振り上げし案山子の一張羅

埼玉 松木清川

さくさくと食む新種梨名は「秋月」
散り急ぐ桜紅葉の続く土手
溢れ湯にちちろ流してしまひけり
一斉に蕾つけたり庭の菊
二ノ鳥居過ぎて紅葉の濃くなりぬ

愛媛 松本恒子

毛筆の手書き看板とろろ汁
開け放つすぐそこに来し運動会
木犀の庭のしじまに香りけり
秋晴や太極拳が外に出て
赤蜻蛉がらくた市に来てゐたり

愛媛 三浦澄江

虫すだく闇に五体を沈め寝る
すねた顔おどけた顔や花梨の実
楯となり台風防ぎし山拜む
名水の郷に父母なし柿熟るる
黒き服胸に華やぐ赤い羽根

兵庫 水野範子

実南天言ふべき言葉さりげなく
山粧ふ足湯に並ぶ膝小僧
鉦叩最後の孤独たたきよる
ヨーデルの流れる牧の霧晴れて
誓子句碑洗ひ登高天上寺

兵庫 水野弘

河豚跳ねる威勢を奮う袋競り
姉見舞うホスピス棟に虫の声
蚯蚓這う車道に迷い泥溜り
病癒え友と熱爛細き腕
古里の秋空高しコンバイン

香川 三橋早苗

里祭り賄ひ担ふ婦人会
年ごとに助つ人の減る秋祭り
半切にどんとすし飯秋団扇
大鍋で煮込むおでんに遠太鼓
紫苑咲き入れ替り来る双子猫

茨城 三輪慶子

綿の実の軽しとも又重しとも
綿吹くを土に落してしまひけり
朝寒や音のかそけき棕櫚箒
朝寒し消毒済の小俎
顔文字のごとく並びて零余子なり

埼玉 向江醇子

父と母墓所異にして秋彼岸
祝ぎ事に急ぐ車に秋黴雨
一本の木と思ふほどの柿落葉
秋麗 駅 毎違ふ曲流る
頭の上に可可可と笑ふ柘榴かな

佐賀 森田子月

日本の空に目覚めて秋澄めり
放蕩の帰り道なる猫じやらし
この時代産まれて生きて曼珠沙華
一生分鈴虫なくを今聞けり
稲刈るや地元力士が大関に

鈴の奏

品川鈴子選

買うほどの物かと通草笑われて
愛媛 濱田ヒチエ

敬老の玉入れ二回女性勝つ

間引菜も貴重品なみ野菜高

秋祭り例のなきほど大喧嘩

除塩の田稲穂たれても母はなし
兵庫 土屋 青夢

自然薯を標本のごと継ぎ足して

枝豆をこんなに染めて味気なし

なめこ汁箸を代へても同じこと

秋霖に雨戸のきしむ庵暮るる
兵庫 坊野貴代美

鈍行の線路の継目秋の音

露を舐め手の濡れ払ふ朝の猫

秋の空姫住みそうなワイン城

一願を込めて突く鐘彼岸花
兵庫 岡田満喜子

赤とんぼ悟り澄まして友の病む

片足の鳩にゆらゆら秋の蝶

子をせかす声大きく秋の暮

エビイモ煮父の皿にはそつとのせ
兵庫 池田 久恵

金木屋ガール・スカウト集まりぬ

人声に裏へ廻れば彼岸花

妹を叱り叱られ雨後の秋

追ひ追はれ勢子より早き鹿の足
兵庫 堀口香代子

角切られ軽しと鹿は思はずや

赤き旗振りて鹿追ふ勢子若し

ふりむきて立ち去りがたし帰り花

よろよると上へ下へと秋の蝶
兵庫 長瀬 節子

ブラジルの友を見送る返り花

放射線新藁覆ふ青シート

雨激し休耕田にチチロ鳴く

此の庭と一日終りの落葉掃く
愛媛 大西ユリ子

歩道にも這ひ上がる葛田へそつと

濡れ縁に座すや落葉の傍に寄る

桜の樹あと幾年や落葉掃き

石仏群一輪すくと白桔梗
兵庫 四葉 允子

曼荼羅を照らし出したる秋灯

醉芙蓉胸過るなり去りし庭

奈良の秋地図に見入りて異邦人

秀 鈴 記

買うほどの物かと通草笑われて 濱田ヒチエ

アケビ科の通草は山野に蔓延り秋には淡紫色の果実が生る。長さ十センチ・直径五センチほどの実が熟れると皮が縦に裂けて中から白い実がちらと覗く、それが綻びた口元を思わせる。山口誓子の句「あけびの実餅なり種のある餅なり 昭四三」を新鮮な驚きで愛唱した。黒い小粒種の透く羽二重餅に似て、柔かく淡い甘味が優しい。でもお金を出してまで買うものかと、鄙では笑われる代物。

除塩の田稻穂たれても母はなし 土屋 青夢

津波の引き去った田圃に呆然としたが、懸命に頑張つて手を尽くし塩分を除き、何とか稲を植え付けて、ようやく穂が垂れるまでに育てた。しかしこの稲穂を掌に受けて一番喜んでくれる筈の母親は世に在らず、被災の虚しさは尽きない。

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 近藤 倫子 //

*選句は全て 品川鈴子

露を舐め手の濡れ払ふ朝の猫 坊野貴代美

猫は夜行性だから朝露の草を踏み分けて帰宅した。そして露濡れの肉球や下肢をねんごろに舐めては、朝のおめかしに余念がない。良いご身分の優雅なひととき。

一願を込めて突く鐘彼岸花 岡田満喜子

季語の彼岸花が哀愁を誘う。どれほどの猛暑の年でも正確に秋彼岸の訪れを教えてくれる彼岸花。自然の営みの前に願っても叶わぬこともあると知りつつ、たった一つだけの願いを込めて突く鐘の荘厳な音が天へと昇っていく。どうぞ願いが届きますように。

妹を叱り叱られ雨後の秋 池田 久恵

幼い頃はいつも自分の後を付いてきていたのに、年を

とつた今では妹の方が頼りがいがあつたりする。遠慮も要らない仲で叱つたり叱られたり、支え合いながら大変な時期も乗り越えてきた姉妹。「雨後の秋」に姉妹の歴史を感じる。

角切られ軽しと鹿は思はずや

堀口香代子

鹿の角切りは神使として保護されたために増えた鹿が人や同類を傷つけないように、江戸時代から行われている伝統行事。発情期を迎え攻撃的になつている牡鹿は、自慢の角を切られまいと必死の抵抗をするが、勢子との戦いに敗れ見物人の前で哀れな姿になってしまう。しかし慣れてしまえば頭が軽くて案外悪くない。当の鹿はそう思っていないだろうか。人間も見栄や体裁という鎧を脱いだら結構気軽に身軽になれるかも。

ブラジルの友を見送る返り花

長瀬 節子

日本から言えば地球の裏側から友人が訪れて楽しく日々を過ごし、その友を見送る日に返り花が咲いていた。ブラジルでは春から夏へと季節が移ろうとしていては、遠い距離をワープしたような錯覚を感じる。

桜の木あと幾年や落葉掃き

大西ユリ子

桜の落葉を掃きながら、一体どれほどの落葉を掃いたことだろう、あとどれほどの落葉を掃くのだろう……と。桜の木は難しくて手間がかかるが、愛情をかけて手入れした分きつときれいな花が咲くことでしよう。

醉芙蓉胸過るなり去りし庭

四葉 允子

朝は真つ白なのに夕方になると酔つたようにピンク色になる酔芙蓉の花。昔住んでいた家にも酔芙蓉が咲いていたのを思い出す。今も咲いているのだろうか。擬人化されたその花の名前は懐かしい人の姿も連想させる。

秋の雨駅前のお店まりけり

改正 節夫

都会の駅前には生き物のように様相が変わり、しばらくの間にあつたはずの店は無くなつているし、地方の町の駅前はずつかりさびれて閉店を余儀なくされる。いずれにしても思い出のつまった店がなくなるのは寂しい。冷たい秋の雨が切ない気持ちをもますます切なくする。(以下略)